

「ムスリムの生活世界とその変容——フィールドの視点から」(平成 19 年度第 4 回研究会)

日時：2008 年 2 月 16 日 (土) 午後 1 時半より午後 6 時半

場所：AA 研マルチメディアセミナー室(306 号室)

報告者と報告タイトル：

大野旭 (楊海英) (静岡大学)

「二つのホトン人集団—モンゴル国・内モンゴルに住むモンゴル系ムスリムの昨今」

吉田世津子 (AA 研共同研究員、四国学院大学)

「変化の定位 —— 北部クルグズ (キルギス) 農村における新イスラーム化の一試論」

コメンテーター：澤井充生 (AA 研共同研究員、首都大学東京)

研究会概要

東アジア西部のモンゴル系ムスリム、そして中央アジア東部テュルク系のクルグズ (キルギス) 系ムスリムの生活世界に関する民族誌的報告で、前者を大野旭 (楊海英) 氏、後者を吉田世津子氏が担当した。これまで日本ではあまり知られていなかった地域の研究報告であり、2 つの研究発表がそろってなされたところから、地理的にも近接した 2 つのムスリム民族の興味深い比較・対照がなされた。コメンテーターの澤井充生氏は、現地調査をした中国・回族の事例と関連付けてコメントをした。(大塚和夫)

報告内容

報告 1: 二つのホトン人集団—モンゴル国・内モンゴルに住むモンゴル系ムスリムの昨今

1) 遊牧民の集団統合とイスラームの世界宗教化

歴史上のユーラシアは遊牧民の舞台であった。モンゴル高原から現れた遊牧民たちは緩やかに西へ移動し、テュルク化という現象が生じた。一方、西から東進してきたイスラームも各地で遊牧民たちに受け入れられ、ムスリム集団が林立するようになった。東方において、イスラームが最終的に世界宗教として定着できたのは、モンゴル帝国の遺産の一つだ、という指摘もある。

モンゴル帝国が退潮した後も、遊牧民たちの再統合は繰り返された。テュルク系とモンゴル系諸集団の離合集散は常に歴史的ドラマのメインテーマでありつづけた。今日のモンゴル各地に存在するモンゴル人ムスリムはそのような歴史の結果を物語っている。

2) モンゴル人ムスリムの分布

モンゴル国西部のウブス県タリヤラン・ソムにホトン(Qotung)人と称されるムスリムが約 2,000 人居住している。同国では彼らを *Yasutan*(エスニック・グループ)と位置づけている。

これらのホトン人は、19 世紀末に書かれたロシア人探検家の報告書に登場している。社会主義時代、モンゴル人民共和国の著名な人類学者 Badamqatan による綿密な調査に基づく民族誌が上梓されている。

報告者は 1994 年と 1995 年に二度にわたってホトン人の地域に赴いて調査を実施した。自分たちはジュンガル・ハーン国時代にオイラート・モンゴルによってモンゴル高原に移住させられたテュルク系の人々の子孫である、という認識が彼らの間に強く維持されていることを確認した。また、社会主義時代に否定されていたイスラーム信仰も静かに復活しつつある現象を目撃した。

モンゴル高原の南部、中国内モンゴル自治区西部のアラシャン盟にも同様にホトンと自称する集団がいる。その人口は約 2,000 人程度で、「民族籍」はモンゴル族となっている。報告者は 2002

年夏にアラシャンに入って調査をおこなった。また、青海省海北州にはトゥマ人というグループがあり、人口は僅か数百人程度だが、彼らもモンゴル人ムスリムである。報告者は 2004 年冬～2005 年春にかけて進めた調査の情報を公開している。

報告者は今までに清朝末期におけるムスリム(回民)反乱とモンゴルとの関係について研究してきた。今後はムスリム反乱が内陸アジアにおける民族・国民国家の形成との関係について調べる予定である。

文 献

楊海英 2002 「十九世紀モンゴル史における〈回民反乱〉—歴史の書き方と〈生き方の歴史〉のあいだ」『国立民族学博物館研究報告』26(3):473-507。

(楊海英)

報告 2: 変化の定位 —— 北部クルグズ (キルギス) 農村における新イスラーム化の一試論

本報告では、旧ソ連領中央アジア・北部クルグズ (キルギス) 農村での社会人類学現地調査に基づき、イスラームの慣習的実践の動態を予備的に考察することを目標とした。

最初に、ソ連時代とポスト・ソヴィエト時代におけるイスラームの研究視角について整理した。次に調査地について中央アジア史の観点から概説した。クルグズ民族の形成過程、イスラーム化、中央アジアのロシア帝国植民地化、ソ連化、クルグズスタン (キルギス) の独立国家化について主な政治的出来事を中心にまとめた。またフィールドであるカラタル村 (仮称) について、ソ連時代における村落形成史、社会主義化・資本主義化諸政策との連関について補足した。さらに本発表の主題であるイスラームについて、ロシア帝国・ソヴィエト連邦・クルグズスタンのそれぞれの諸政策の内容を時代区分に則して整理した。

第四に、カラタル村におけるイスラーム実践の時空間を具体的に検討した。カラタル村住民のイスラーム実践が食事とお茶の場で展開することから、「食卓のムスリム」と特徴をまとめることができると指摘した。これに対してポスト・ソヴィエト時代にカラタル村で開設された幾つかのモスクは、新しいイスラーム信仰行為の時空間の出現を意味すると主張した。また少数であれイスラーム規範の遵守を基準とする厳格なムスリム住民の出現、北部農村クルグズ人にとって最も重要な葬式における儀礼的手続きの変化、伝道活動に従事する一般住民の出現も、これまでにない新たなイスラーム信仰行為の始まりであることを述べた。最後に礼拝・葬式・禁酒をめぐる諸問題を取り上げ、ソ連時代の約 70 年間を経験した北部農村住民にとって、新しいやり方のイスラーム化が始まっていると主張した。またこのイスラーム化は、ソ連崩壊後のとめどない経済悪化が底を打ち、自力で経済体制転換を乗り切りつつある人びとが原動力となっていることを強調した。(吉田世津子)